第六編

朝鮮民族独立運動

第一章　一九一〇～二〇年代における反日独立運動の概略

一九一〇年代の独立運動

日本帝国主義の植民地統治下の朝鮮には、いわゆる「武断政治」の憲兵・警察制度が布かれ、学校教師・官吏・役員をとわず腰に帯剣する暴圧統治のもとで、朝鮮人民は反日・排日感情を累積していた。ロシアにおける十月大社会主義革命の成功は、耐えがたい民族的抑圧と収奪、横領に呻吟していた朝鮮人民にかぎりない勇気と民族独立運動の決起を鼓舞した。一方アメリカのウィルソン大統領は植民地民族に影響力を与え植民地再分割のための外交政策を有利に展開し発言力を強めるため、「民族自決」を提唱した。朝鮮においても民族主義者たちはこれに共鳴し、民族独立運動に加担する契機となった。この二つの社会的潮流が合流し、一九一九年三月一日を期して独立闘争が全国的にもえあがり、数カ月にわたって闘争の火はもえつづけた。しかし日本帝国主義の弾圧により七、五〇〇名の虐殺者と一万六〇〇〇名の負傷者、四万七〇〇〇名の被検挙者などの多大な犠牲者をだして結局鎮圧されてしまった。だが、日本帝国主義者も朝鮮の統治形態を「武断政治」から「文化政治」へとより巧妙な方法に改正した。

朝鮮人民の民族独立運動は三・一人民蜂起を契機として民族主義者の影響力の衰退とマルクス・レーニン主義で武装された労働者階級の台頭によって新しい段階へ移行した。

一九二〇年代の独立運動

一階級として形成された労働者は、一九二〇年四月には労働者相互間の扶助や啓蒙事業を推進する目的で京城に「朝鮮労働共済会」を結成した。

二一年九月には朝鮮における最初の大規模な労働運動として釜山埠頭労働者をはじめ五〇〇〇余名の労働者が一五％の賃上げ要求を掲げて一五日間にわたる頑強な労働運動を展開した。労働運動も盛んになり二〇年から二二年の三カ年間に一六三件の労働争議がおこった。労働運動のかたわら、マルクス・レーニン主義も輸入されはじめ、中国、ソ連、日本などで出版された「共産党宣言」「資本論」「帝国主義論」などが紹介されるようになった。

一九二二年一〇月には「朝鮮労働共済会」を発展的に解消し、「朝鮮労働連盟会」を「朝鮮労働大会」に改編して労働運動の指導にあたった。農民運動も労働運動と同じく各地で盛んにおこり、小作争議をはじめいろいろな闘争がくりひろげられた。一九二五年四月一七日に労働者階級を代表する朝鮮共産党と高麗共産青年同盟が創建され、民族解放闘争の先頭にたった。しかし日本帝国主義もさっそく五月に悪名高い「治安維持法」を公布して弾圧を加えた。このような弾圧にもかかわらず、二六年六月一〇日京城において数万の愛国人民を結集し「朝鮮独立万才！」「日帝を追出せ！」のスローガンを掲げて示威運動が展開された。二〇〇余名の共産党員が逮捕されるなどの犠牲者をだしたが、独立運動の先頭に共産党がいることが全人民に知れわたり、共産党の影響力を強めた。だが、共産党も利己主義者や個人英雄主義者がふくまれ、「ソウル派」「火曜派」「北風派」「上海派」等の多数の派閥があって、内部の派閥争いが絶えず、主導権を掌握するためには手段を選ばず日帝の官警すらも利用した。こうして四次にわたる大検挙事件をうけて、二八年

にはみずから党を解散せねばならなかった。

労働・農民運動はふたたび盛んに起こり、二九年の大恐慌は労働者、農民の生活を一層窮乏に追い込んだ。二九年一月に元山地方の労働者二〇〇〇余名は「外来資本の搾取を破壊せよ！」などのスローガンを掲げて八二日間にわたる長期闘争をおこない、ヨーロッパ諸国から声援を受けるなど有名なストライキとなった。

一九二九年一一月光州において日本人学生が朝鮮人女子学生にたいし民族的蔑視から侮辱したことに端を発した反日闘争は半年も続き、それは一九四校から六万名の学生が参加した反日感情爆発の象徴的な闘争であった。

恐慌下における労働者、農民の闘争はしだいに激化して行く傾向にあり、日本帝国主義は「満洲」を侵略するために朝鮮を安定化しなければならなかった。弾圧も強化され、二九年から三一年の三カ年間に「思想犯」の名目で検挙された人は実に一万五〇〇〇名に達した。この中で半数以上は暴動に参加した人たちであった。

朝鮮の独立運動も朝鮮内で展開するには条件が制限され、困難をきわめた。共産主義者は「満洲」などにのがれなければならず、日本帝国主義のもとでの独立運動も勝利をうるためには武装闘争を展開せねばならなかった。

第二章　抗日武装闘争の開始

日本帝国主義は朝鮮民族独立運動に対する弾圧を一段と強化し、都市、農村をとわず、山間僻地にいたるあらゆる地域に軍隊・憲兵・警察隊を網の目のように張りめぐらし、それでも直接的な弾圧の手がとどかないところには手先やスパイを布置するなど、一連の弾圧機構を各地に設置するとともに、他方においては地域巡回講演・映画・婦人会・母姉会を組織し、白衣着用風習にかえて色染服着用を奨励するなど、思想面から朝鮮人の生活風習や民族意識まで抹殺せようとした。こうして一九二〇年代から三〇年代の初期にかけて急速に高揚した民族解放労働・農民運動を、武力と思想の両面からことごとく弾圧した。

このような悪条件に直面した朝鮮の共産主義者たちは、民族独立運動を地域的な労働農民闘争ではなく、日帝の武力弾圧に対しては武装闘争をしなければならなくなり、抗日武装闘争に適した「満洲」にその根拠地を設置することになった。当時「満洲」は日帝支配下にあったが、広大な地域だけに支配体制は弱く、ことに東満一帯はその住民の八割が朝鮮人で、その大多数が朝鮮内で民族独立運動に参加したが、日帝の弾圧強化によってよぎなく亡命せざるをえなかった愛国闘士や、植民地統治のもとで苛酷な搾取と収奪によって土地や生活手段を奪われて移住した貧農が約八〇万人もいた。これらの地域は、中国人の軍閥や地主による二重三重の搾取と抑圧のもとで、以前から民族主義者が指導した独立軍の抗日義兵の闘争地であり、中国人の抗日部隊もさかんに闘争をくりひろげていた。さらに、これらの険阻な山岳地帯には原始林が生い茂って朝鮮の北部山脈と連なり、ソ連とも国境を接しているので、地形的にも武装闘争に適していた。

この地において、朝鮮労働党の組織者であり指導者である金日成を先頭とする朝鮮の共産主義者たちは、抗日武装闘争をおこなう遊撃隊組織と広範な人民大衆の愛国的な力とを密接に結合させながら

抗日武装闘争に立ち上がった。金日成の指導のもとに一九三二年のはじめ、朝鮮の進歩的労働者・農民および愛国的青年たちが結集し、最初の遊撃隊が「満洲」安図県で結成された。これにひきつづき三二年の春には汪清・延吉・和竜・琿春などの各県でも遊撃隊が結成された。かれらはマルクス・レーニン主義思想で武装し、反帝・反封建民族解放闘争と社会革命闘争を密接に結合させ、それを基盤に革命闘争へ人民大衆を結集する組織者であり、革命軍であった。武装闘争に不可欠な問題は隊員の武装であった。優秀な装備をした日本軍と戦うのは困難であり、武器も日本軍・警察隊・偽満軍から鹵獲して武装しなければならず、最初は鎌矢・棍棒などで敵の武器を奪う命がけの危険な闘争をくりひろげ、銃一挺奪うために命を捧げた人たちも少なくなく、「全ての武器は血でもって奪い、生命と替えた。われわれが持っているどの銃一挺、剣一本にも同志たちの高貴な血が浸っていないのはなかった」（「抗日パルチザン参加者たちの戦闘回想記」一ページ）。このような勇敢な戦いによって武装を整えていった。

（注）「装備は如前共匪において最も高く昭和十年末において約一人に一挺の長銃又は拳銃、三人に一個の爆弾、一八〇人に一挺の軽機を所持している……実包は射撃優秀なるも平均二〇〇発、其他普通射手には一〇〇発……」と記録されているが、これは日本側のすくなく見積った数字であろう（「満洲共産匪の研究」第一輯（軍政部顧問部）一八三ページ）。

第一節　遊撃根拠地・解放地区の創設

日本帝国主義との長期の武装闘争を敵の統治地区で展開するためには遊撃根拠地の設置が必要であった。一九三二年から設置された遊撃根拠地は公開的解放地区形態をとり、遊撃隊と人民大衆との連係を強め、革命勢力の育成および遊撃戦の後方としての役割のほかに戦闘に有利な地理的条件をも考慮した上、朝鮮の北部国境と接する延吉県をはじめ汪清・琿春・和竜・安図県などの各県に広範な地域を解放して設置したのである。

遊撃根拠地―解放地区では、遊撃隊員の増大、武装の強化や政治軍事訓練を日常的に行なうなど質量的にも戦闘力の強化をはかり、このほか準軍事団体として自衛隊・少年先鋒隊も結成され、また農民会・婦女会や被服廠・武器製造所などの後方機関が設置された。また人民の自治によって運営される革命政権を樹立し、日本人と悪質な地主の土地や財産を無償没収して農民に無償分配する土地改革を実施するなど人民を搾取と抑圧から解放した。

解放地区の人民は生活を通じて敵と味方の区別が明確になり、新しい社会を実現するため闘争している遊撃隊を信じ、苦楽をともにしながら敵の攻撃にもすべての力を結集し解放地区を固守した。解放地区内で実施された民主的諸改革は敵の統治下にある人民たちにも知れわたり、多数の人民たちが解放区に移住して来た。このようにして抗日武装闘争を拡大、強化しうる物質的土台が築き上げられ、漸次強化されていった。

第二節　左翼冒険主義とのたたかい

当時革命隊列内に存在していた小ブルジョア的革命分子と派閥分子は革命闘争が激化・発展する条件のもとで、植民地支配下にある朝鮮の具体的諸条件を考慮せずに根拠地――解放地区創設をもって革命闘争の勝利間近しと単純に考え、敵の力を軽視・過小評価し、反日民族解放戦線に結集させるべき愛国勢力の団結を阻害し、社会主義革命の即時実現を主張して日本帝国主義からの民族解放闘争を放棄するのみか、解放地区では労働者と貧雇農のみをもってソビエト政府をたて、すべての土地を没収して政府所有にし、それを農民に耕作させるような急進的左翼冒険主義偏向の諸政策を実施して愛国的勢力の団結に否定的影響を与えた。また左翼冒険主義者は、敵の統治地域内の人民の大多数にむかって〝反動〟とか〝日和見〟と規定して排撃したため、解放地区の人民たちとの連係を杜絶させ、孤立状態においこむ危険な事態をもつくりだした。そして彼らは独立軍と中国人反日部隊とのあいだにも対立を助長させるなど、当時は組織されてまもない遊撃隊列の前途に数多くの障害をもたらした。

金日成をはじめ共産主義者は左翼的偏向の弊害を取り除き克服するため積極的に闘争を展開し、一九三三年の春、汪清県で招集された東満の党員会議において、遊撃隊結成後一年間の活動を総括するなかで、左翼冒険主義偏向を批判して革命闘争の前進のために、冒険主義者がもたらしたあやまちを具体的に指摘するとともに是正策を講じ、会議以後、解放地区では、反帝反封建闘争に広範な人民大衆を網羅してソビエト政府形態を人民政権形態である人民革命政府に改編し、反帝・反封建闘争の新しい政綱を発表して政治、経済、文化の諸分野にわたる民主改革を実施し、土地の私的所有を一切否定した左翼的偏向を私的所有制に改正して土地を農民に分配するとともに、日本人や親日悪質地主の土地のみは無償で没収し農民に無償分配を行ない、遊撃隊と人民の連係を強め、食糧増産を奨励した。敵に包囲された条件のもとでの食糧増産は解放地区の維持強化に役だったばかりでなく、武装闘争発展への大きなはげましとなった。

第三節　武装闘争の発展

遊撃隊を強化し、抗日武装闘争を有利に展開させた献身的な共産主義者たちは、解放地区内で左翼偏向者とたたかいながら、対外的には民族主義者が指導する独立軍と反日中国人部隊との連係を強化するためつねに努力をおこたらず、ひいては地主・資産家で反日闘争に参加するものともためらわず手を結ぶ方針をたて、優秀な隊員を既存反日部隊に派遣して遊撃隊と連係をもつよう忍耐づよく工作した。そして一九三三年九月には、反日部隊とはじめて大規模な共同作戦を組んで東寧県城進撃戦争をおこなった。金日成の指導のもとに抗日遊撃隊と反日部隊一六〇〇余名が敵陣地（日本軍五〇〇名、「満洲」軍二〇〇余名、砲、戦車など現代的装備をもつ）に大攻撃を加え勇敢な戦闘のすえ勝利をおさめた。この戦闘以後、反日部隊は遊撃隊に対する認識を新たにし、左翼冒険主義的偏向者たちの急進的傾向を克服するうえでも一歩前進しただけでなく、東満において抗日遊撃隊と反日部隊間の対立は基本的に取りのぞかれ、広範な反日勢力が抗日闘争に結集されて大規模な戦闘が各地でくりひろげ

られ、抗日遊撃隊の活動領域もしだいに拡大されていった。

日本帝国主義は政治的・軍事的に脅威を感じ、いわゆる「討伐」を強化する一方、あらゆる手段を講じて根拠地に対する攻撃を強化し、一九三三～三六年の間に兵力を五万から四〇万に増強し、一九三三～三四年の一年間だけでも約四万キロにおよぶ警備道路を新設し、また各種の密偵網を組織した。敵の攻撃が強化されている条件のもとで遊撃根拠地の守備防衛を強化させる一方、敵に対してより能動的な組織的攻撃を加えるためには、各地において遊撃戦を展開している隊員を統一された軍事的組織体制に改編する必要にせまられ、一九三四年三月、各地の遊撃隊を統合して人民革命軍を編成した。これは遊撃隊に対する共産主義者の統一的指導を強化し、抗日遊撃隊の戦闘力を強化させる一歩前進であった。

第四節　労働者・農民運動

東満各地において日本帝国主義の統治に甚大な打撃を与えた武装闘争の展開は、「満洲」各地のみならず朝鮮の全人民に民族解放への希望とかぎりないはげましとなった。直接的には抗日遊撃隊員の積極的な地下活動で人民大衆に反日気勢をたかめ、労働者・農民・青年学生の間に革命的組織が拡大された。一九三三年春には、延吉県八道溝の全鉱労働者一五〇余名が一度に遊撃隊へ集団入隊したほか、朝鮮内でもソウル・平壌・釜山をはじめ産業都市に革命的労働組合が組織され、また貧農・雇農を中心に広範な農民を網羅した農民組合も咸鏡南北道・慶尚南北道などで組織された。一九三三年七月には釜山のゴム工場労働者一〇〇〇余名が参加したゼネスト、黄海道遂安郡の農民暴動をはじめ、苛酷な弾圧にも屈せず、賃銀引上げ、八時間労働制の実施、団体契約権の実施、民族的差別待遇の撤廃などの要求をかかげてたたかった。

一九三一年から三五年までにおこった主要なストライキ件数だけでも、九〇二件、参加者は七万〇九二九名におよんだ。同時期の農民の小作争議は件数三五一件、参加者一万七七九五名であり、被検挙者数は一万余名にのぼった。抗日武装闘争の影響と共産主義者の指導のもとで発展した革命的労働者・農民闘争は、階級的・政治的にますますめざめて小ブルジョアインテリの影響から脱皮し、労農提携のもとで反日民族解放闘争に統一戦線を組む条件がつくられていった。

第五節　抗日遊撃根拠地――解放地区の解散

抗日遊撃隊の武装が充実し、力量が成長するにつれ、人民大衆が反日闘争隊列に結集されていくとともに、遊撃根拠地にたいして日本帝国主義は軍事的武力攻撃と地域的経済的封鎖を強化する一方、遊撃隊内に政治的思想的分裂・破壊の陰謀をおこなうなどあらゆる方法と手段を用いた。

日帝は革命隊列内を攪乱し、対立を助長し、分裂させる目的で民族解放運動隊列からの「帰順」分子を利用して一九三二年二月に「民生団」（注1）という手先機関を組織し、中国領土である間島にたいし「間島は朝鮮の領域であるから朝鮮人が自治をおこなうべきである」とデマ宣伝をひろめ、朝中両国人民を反目離間させようとしたが、この陰謀も共産主義者の指導下で武装された人民には通用しなかった。さらに、手先・スパイ分子を遊撃隊内にもぐりこま

せ、派閥分子と左翼偏向分子を利用して攪乱させ、内部的対立を助長させようとした。(注2)

(注1)、「民生団」は一九三二年二月に結成されて「満洲」の朝鮮人を引き入れようとしたが、日本帝国主義の手先機関であることが暴露され、同年七月には解体せざるをえなくなったが、また同じ目的をもって一九三四年九月に「協助会」を組織した。日本帝国主義の手先団体を総称して「民生団」という。

(注2)、朝鮮人党員の歴史的疾患である派争的傾向を利用して党内攪乱を企図した協助会は、意識的に巧妙な民生団工作をやりはじめた。身を挺して党内に潜入して攪乱工作をおこない、あるいは民生団員が党内に潜入していることを信ぜしめるようなあらゆる方法が採られた（「満洲共産匪の研究」第一輯一一四ページ）。

一九三三年春から遊撃隊内に潜入した民生団分子の摘発運動が開始されたが、派閥分子と左翼冒険主義者の残滓がまだ隊内に潜在している事情のもとでは、この運動はスパイ分子の排除よりもむしろ日本帝国主義の陰謀に利用される面があらわれた。急進分子たちは、二〇年代から共産主義運動に参加した人、民族主義運動に参加したことのある人などを民生団と烙印をおしたり、敵の統治地域下の人民を民生団の影響下にあるとか敵地の地下工作隊員まで疑がったり、また朝鮮の共産主義者の民族解放闘争は民族主義のあらわれであるなどとして反目と疑惑を深める結果となり、数百名の愛国闘士が民生団員の汚名をきせられて犠牲になるような重大な分裂の危機がかもしだされた。遊撃根拠地が民生団摘発運動により助長された反目と分裂の危機に直面している時期に、一九三四年九月から「満洲国首都」の守備隊と「靖安軍」まで動員して、東「満洲」の遊撃根拠地にたいして第三次大包囲攻撃がおこなわれた。根拠地にたいし、「包囲攻撃作戦」「一歩一歩前進」「焦土化」などの戦術をもって冬までの数カ月間執拗に攻撃を加え、一時占領した地域では秋の穀物と民家を残らず焼却し、人民との連係を杜絶させ、政治的・経済的に封鎖・孤立させるため狂気じみた蛮行をはたらいた。(注1)そのため「根拠地内の人民の事情、とりわけ食糧難をはじめとする経済的困難は、言語をもっていつくせないほどの深刻さをおびるようになった」。(注2)

(注1)、匪賊地帯に於ける散在部落の根絶により匪賊の糧道を断ち切ってこれが自滅を計る……」（「満洲共産匪の研究」対策編第二輯、三〇ページ）。

(注2)、「朝鮮近代革命運動史」日本語版、三四四ページ。

このような敵の多面的な猛攻に対置するために、遊撃根拠地をふかい山岳地帯に移動させたので、敵統治地区人民との連係もほとんどさえぎられ、敵の攻撃に守勢的態勢にならざるをえなかった。

解放地区創設以来最大の困難と危機にさらされた革命隊列内では、かもしだされた危機を打開するため、一九三五年二月末から三月はじめにかけて開かれた「大荒蔵会議」において、金日成は分派分子と左翼偏向分子に対し反民生団闘争におけるあやまった一連の行動を批判し、一〇日あまりにわたる緊張した討議がおこなわれたが、根深い左翼冒険主義者と分派主義者の主張は、容易に論破されなかった。春になってふたたび「腰営口会議」が招集された。この会議においても見解は対立したままであったが、金日成の見解を多数が支持するようになり、彼の提案によって敵の攻撃にたいし守勢的形態から能動的・主動的な攻撃を広大な地域で展開するため、固定的な遊撃根拠地―解放地区の解散を決定した。

会議後、遊撃根拠地は解散され、人民革命軍は北「満」、南「満」および朝鮮など広大な地域に進出して能動的闘争を展開した。一九三五年五月、京図線（哈爾巴嶺）で日本軍用列車を転覆して将校三〇〇余名をせん滅、六月には東寧県の老黒山戦の勝利などの成果をあげるとともに、朝中両国人民を団結して反日帝闘争に決起させる政治工作も進められ、日本帝国主義の統治に大きな打撃を与えた。

第三章　祖国光復会の結成
―十大綱領

第一節　祖国光復会の結成

遊撃根拠地を解散して広範な地域に進出した朝鮮人民革命軍にとって、日本帝国主義のソ連・中国にたいする侵略戦争の拡大準備に反対し民族解放闘争を強化させるためには、より多くの人民大衆を抗日武装闘争隊列に結集させ、抗日武装闘争を一段と強化しなければならなかった。日本帝国主義は「満洲」侵略後、侵略戦争を拡大するため、朝鮮を「兵站基地」とし、朝鮮人民に囚人的重労働と低賃銀をおしつけ、豊富な地下資源を収奪横領して軍事的重工業をおし進めた。一九三一年から三八年の間に工業生産高は、金属工業は一四倍、化学工業は三倍、紡織工業は五倍（細川嘉六「植民史」二九一～二ページ）などいちじるしく増加した。しかし労賃は日本人の半分以下であり、名目賃銀すら年々低下していった。労働時間は、若年女子労働者が大部分である紡織業をはじめどの産業部門でも一二時間以上が大部分であり、日本人労働者は監督・職場長などの役付で、朝鮮人労働者に重労働を強制する見張り役をしていた。このような低賃銀・囚人的強制労働および民族的差別は朝鮮人労働者が階級的、民族的支配から自己を解放するための意識を高め、反日闘争を強化させる社会的条件をつくりだした。農民の土地は収奪されて小作人に転化し、また恐慌以後は農産物と日本独占資本の工業生産品との価格差の隔離、重税、軍事食糧供給のための強制供出制の実施などによって、農民の生活は破綻し、農民は自己の生産した米ではなく、「満洲」粟やよもぎを食べなければならなかった。一握りの親日隷属資本家と地主をのぞく各階各層の人民大衆は、日本帝国主義の植民地支配と抑圧の強化に反対する気勢を日増しに強めていった。このような社会的、経済的事情と階級的対立の深化は民族解放闘争を展開する重要な社会的基盤をつくりだした。

一九三六年二月寧安県南湖頭で開かれた会議とこれにつづく五月の無松県東崗会議において、革命の中核勢力は当面する諸条件を分析し、反帝反封建闘争の綱領と反日民族統一戦線闘争を拡大発展させるための革命的常設機関の必要性が論議され、ただちに実行に移された。金日成は南湖頭会議以後、統一戦線体としての「祖国光復会」を結成するため準備委員会を組織し、綱領作成に着手した。一九三六年五月の東崗会議において、「祖国光復会」の創立宣言と十大綱領（後掲）が発布され、金日成は会長に推選され、機関誌として「三・一月刊」を発刊することが決定された。これは朝鮮の革命運動史上重要な意義をもつ歴史的事件であり、共産主義者の指導のもとに一にぎりの親日分子を除外した階級、地方、宗教などの相違を

超越してすべての愛国的朝鮮人民を結集し、反日武装闘争と革命党創建の準備を決定的段階におしすすめる画期的事件であった。「祖国光復会の十大綱領は一般的には反帝反封建の民主々義革命段階での朝鮮共産主義の基本任務を定式化して将来創建されるマルクス・レーニン主義党が採択する最低綱領の基本的諸要求を反映したものであり……わが国における革命の明確な遂行方法と展望をしめすことによって、すべての共産主義者と人民大衆がすすむべき道をはっきりと教え」たものであった（「朝鮮近代革命運動史」日本語版三六三ページ）。

第二節　新しい根拠地の創設と闘争の展開

「祖国光復会」結成以後、朝鮮人民革命軍部隊は、朝鮮の国境に近く、けわしい山岳地帯で敵の支配力が弱く、朝鮮の貧農や火田民が多い、長白一帯に新しい根拠地を創設した。長白根拠地は東「満」の解放地区とは異なり、秘密形態をとり、敵の攻撃や情況のいかんにより流動性のあるものであった。

この根拠地の密営を拠点に、人民革命軍部隊は小・大規模の戦闘をおこない、敵の後方を攪乱させ、敵兵を恐怖と不安におとしこんで戦闘士気を減退させる反面、人民革命軍の士気はもえ上がり勝利への自信をかため、各地の戦闘で多くの戦果をおさめた。そのおもな戦闘は、一九三六年八月の長白山脈一帯における敵の「討伐」中心地撫松県城の攻撃であり、一八〇〇余名の兵力をもって敵三〇〇余名を殺傷または捕虜にし、多くの軍需品を鹵獲した。一九三六年の冬には「満州軍」と朝鮮駐屯兵一万余の兵力を配置して「大討伐」戦が開始され、翌年二月まで執拗な攻撃が加えられたが、いずれも惨敗に終わった。この連続的な勝利は「満洲」、朝鮮の各地に伝わり、「祖国光復会」にかける人民の期待は大きく、「祖国光復会」の組織拡大に有利な基盤をつくり出した。長白一帯は「祖国光復会」結成から数カ月の間に組織網がつくられ、東「満」・北「満」南「満」の各地に派遣された工作員の積極的活動によって、十大綱領の意味を朝鮮人民に徹底的に浸透させ、広範な地域に「祖国光復会」を組織し拡大させた。

他方、朝鮮内では、朴達・朴金喆らが活動していたが、「祖国光復会」の組織を拡大させ反日統一戦線と革命党の創建を準備するため、一九三七年一月に「甲山工作委員会」を「朝鮮民族解放同盟」に改編し、「反日会」「反日婦女会」「反日少年会」などを通じ、労働者・農民のあいだに深く浸透させるとともに、民族主義者の指導する抗日武装部隊「朝鮮革命軍」や咸境南道の「天道教々徒」なども統一戦線に加え、「朝鮮民族解放同盟」に編入させた。

「祖国光復会」に呼応してたちあがった青年達は、きびしい国境警備網をくぐりぬけて、多いときは日に数十人も群をなして人民革命軍に入隊し、労働者や農民は数十里の積雪山道を食糧・被服をかついで密営地をたずねたことなどにみられるように、朝鮮人民の反日愛国闘争心は大きくもえあがった。愛国人民の組織――朝鮮民族解放同盟――と連係をもつ人民革命軍は、日本帝国主義の全面的中国侵略開始直前の一九三七年五月初旬にはじめて朝鮮内に進攻し、普天堡を占領して日帝の統治機関（警察駐在所・面事務所・金融組合）を破壊焼却するなど勝利をおさめ、男女老少をとわず喜びにつつまれた住民たちは「朝鮮独立万才」「金日成将軍万才」の叫びをあげて遊撃隊員を抱きしめた。朝鮮人民革命軍は「朝鮮人民に檄す！」というつぎのような檄文を発表した。

布告　奸悪このうえない強盗日本帝国主義は、朝鮮を占領して今日に至る二四年間総督政治という植民地政治をもってわれわれの同胞をジュウリンして虐殺してきた。従ってわれわれ朝鮮同胞は血とあせをもってつくり上げた財産を彼らのために残らず略奪されて悲惨な植民地奴隷の生活を強要されて来た。そればかりではない。彼らはわが民族を第二次世界大戦の弾丸よけ部隊として中国侵略のための戦争道具としてかり出している。わが朝鮮民族はいま生死存亡の危機に立っている。われわれはわが民族の進む方向を切り開いて人民の生活を打開し、日本帝国主義を打倒して祖国を解放するためにたたかう朝鮮人民革命軍である。われわれが六、七年の間「満洲」の広野において日本帝国主義の侵略者どもとの決死的な戦いで致命的な打撃を与えたことは、天下が皆承知しているとおりである。本軍は朝鮮にいる愛国の志士と熱烈な本軍の愛国闘士との一枚岩の団結のうえに、朝鮮民族の血を吸いとって腹をこやしている吸血魔―朝鮮総督府と直接たたかうことを目的として豆満江と鴨緑江を渡り咸境南北道の一帯へ遠征することになった。しいたげられている朝鮮の同胞よ！　速やかに出動して反日民族統一戦線に団結し、各種の闘争をもって本軍の遊撃戦争に呼応せよ！　一日も早く日本帝国主義の統治を粉砕して、真の朝鮮人民の政府をうち立てるために邁進しようではないか！　一九三七年六月一日、朝鮮人民革命軍司令金日成（「朝鮮近代革命運動史」日本語版三八六ページ）

朝鮮内で惨敗した日本帝国主義は、多数の兵を動員して追撃戦に出たが、六月三〇日の間三峯における戦闘でまたも一五〇〇余名にのぼる多数の殺傷者と捕虜をだす惨敗を喫した。普天保戦闘の勝利は全朝鮮人を鼓舞させ、民族解放への希望をいだかせた。労働者は武力闘争に呼応して日本帝国主義の軍需産業や強制労働を拒否し、サボタージュやストライキを起こした。一九三八年秋、端川―豊山間鉄道敷設工事に強制動員された二〇〇〇余名の労働者が集団逃亡するなど熾烈な闘争を展開し、農民も収奪横領・強制徴用反対、小作争議など頑強に反日闘争を展開した。

日本帝国主義は中国にたいする全面的侵略戦争を開始し、「兵站基地」としての朝鮮から人的・物的収奪横領を強化（一九三八年「総動員法」施行）した。他面において一九三八年七月「国民精神総動員連盟」、翌月には「朝鮮防共協会」を結成し、翌年末までに三五〇〇余支部を組織させ、また反共と侵略遂行宣伝のため一九三七年九月から四〇年一月まで警察の強制動員による「時局座談会」の名目で三〇万九〇〇〇回の集合に、一六〇六万余人を動員させた（「植民史」細川嘉六著、三七七ページ）。また長白革命根拠地一帯には、刑事を多数潜入させて大検挙を実施し、朝鮮民族解放同盟の指導者、朴達・李悌淳・朴金喆らをはじめ二〇〇〇余名の検挙者をふくめ、一九三八年一ヵ年間に四万四〇〇〇余名の共産主義者および愛国人民が検挙投獄された。朝鮮民族解放同盟と祖国光復会の組織も破壊され、民族解放闘争にも少なからぬ打撃となった。こうした悪条件のもとにおいても武力闘争は各地で展開され、一九三八年の春富爾河戦闘では、三〇〇余名の戦力をもって日本軍三〇〇余名と「満洲軍」五〇〇名と交戦し、日本軍全部と「満洲軍」二〇〇余名を殺傷捕虜にし、軽機関銃六挺・歩兵銃四五〇余挺その他の軍需品を多数鹵獲する戦果をあげた。日本軍は一九三八年末の冬期「討伐作戦」には十余万の兵力を集中し、執拗な包囲攻撃を加え、翌春解氷期までの数カ月間に数百回の大小戦闘を交わす大作戦であったが、戦果はなかった。包囲されながらも勇敢に連戦連勝した朝鮮人民革命軍は朝鮮人民を鼓舞した。破壊された祖国光復会を再建拡大するため、一九三九年五月中旬には厳重な警戒線を突破して鴨緑江

を渡って茂山地区に進攻し、国境警備隊および警察隊と大紅端の野で大激戦をくりひろげ、「無敵皇軍」を敗北させる大打撃を与えた。そして各地の朝鮮人民に祖国光復会綱領をひろめ、人民革命軍を紹介して人民を激励し、普天保勝利以後苛酷な弾圧によって一時下火になっていた大衆運動に新たな希望をあたえ、故国の土をふんだ人民革命軍は樹木の皮をむいて「日本のファッシスト・軍閥を打倒せよ！」「朝鮮民族の自由と独立、解放のために不屈の戦いを続けている東北抗日連軍に参加して戦おう！」「抗日大戦の勝利万才！」などのスローガンをきざみこんだ。

第三節　小部隊活動への転換

日本帝国主義はドイツ、イタリアと軍事同盟を結び、太平洋戦争への戦争拡大はもう時間の問題であった。日帝の「兵站基地」としての朝鮮において人的・物的略奪は極度に強化（一九四〇年頃まで）に軍事工場労働者約一〇万人。志願兵の名目で徴兵された学生八万四〇〇〇余名、強制供出制度一九三九年実施――、国防献金、軍事施設への農耕地の強制収容など）され、残虐な弾圧がおこなわれた。ストライキや怠業もただちに検挙投獄の対象となり、過去反日運動に参加したことのある人は無条件で投獄され、虐殺までおこなわれた。朝鮮人民革命軍の反日運動にたいしては数十万の関東軍を動員して経済的封鎖・焦土化戦術をもって包囲攻撃を加える一方、人民と隔離させるため、反共、その他の謀略宣伝を強化し、「皇国臣民」化を強要するなどあらゆる手段をもちいた。当面の日本陸軍の主力関東軍との闘争は冒険的であるばかりではなく、近づく解放の日を有利に迎えるため、革命勢力を保存発展させることが新しい情勢のもとでの重要な問題であった。

一九四〇年八月におこなわれた敦化県の小哈爾吧嶺会議において、金日成の提議により朝鮮人民革命軍は小部隊と小組に改編して朝鮮と「満洲」の広大な地域の人民大衆に潜入し、反日革命団体を復活拡大させる地下闘争への転換を決定した。一九四一年から小部隊活動は開始され、また日本帝国主義との最後の勝利戦と解放後にそなえて、軍事的・政治的に有能な幹部を養成するために、多数の革命軍がソ連に派遣された。他方多くの小部隊と小組は遠く釜山、仁川地方まで厳重な警戒網をくぐりぬけて各地にひろがり、日本軍駐屯地の襲撃、軍用列車の奇襲・転覆、道路・橋梁の破壊などをおこない、また反日反戦、徴兵制度反対、反逆者の処断などの活動を展開しながら革命団体を復活拡大し、反日闘争に人民を決起させるつぎのような呼びかけを行なった。

同胞の皆さん！　この真暗い中をふみわけて苦痛からぬけ出るには、祖国光復を求める人民解放の道においてはじめて解決されるであろう。まさにいまこそわが朝鮮の解放を決定する時がきた……強盗日本帝国主義の侵略を崩壊させることはわが朝鮮人民の祖国光復と民族解放の前提となる……遊撃隊を賛助し……各地で祖国光復会を組織し……たちあがって強盗日本帝国主義を打倒してわが朝鮮民族の生存のために最後の出路をきり拓かねばならない。」（一九四〇年七月七日祖国光復会の檄文「朝鮮人民に告げる書」、「朝鮮近代革命運動史」日本語版四六二ページによる）。

小組は解放日を迎えるまで危険をおかしながら十数回にわたり朝鮮内に潜入して、日本軍の配置動向を偵察する一方、労働者、農民青年学生に反日反戦闘争を扇動し、祖国光復会の旗のもとに結集さ

せる活動で人民大衆から支持と信頼を受けており、日本側の資料によっても一九四二年に地下政治団体が一八三団体あったとされている。反日気運が高揚している時に、地方別割当により強制徴集された労働者は朝鮮のみならず日本の各地に送られ、炭鉱・軍需施設などで苛酷な強制労働を強要されていたが、労働者の逃亡はたえず、一九四三年興南本宮工場における官斡旋労働者は赴任して一カ月間にその半数が、二カ月後には八割が逃亡した（「危機における日本資本主義の構造」井上、宇佐美共著 九〇ページ参照）。同年上半期だけでも三〇余万名が日本に強制徴用され、そのうち一一万名が逃亡し、朝鮮でもっとも主要な軍港鎮海港の日本海軍内の朝鮮人兵士が結束して反日反戦の武装蜂起をおこなおうとし、あるいは一九四四年咸興刑務所の爆破焼却と集団脱走など広範囲かつ強力な反日・反戦闘争が展開された結果、関東軍を「討伐戦」に固着させ、多角的な攪乱戦は敵に大きな損失をあたえた。いかなる弾圧にも屈せず進められた反日闘争は日本帝国主義の崩壊を促進させ、朝鮮民族解放を主動的にむかえるための一四年間の不屈なたたかいは、一九四五年八月一五日にその勝利の日を迎えた。

附録

▽祖国光復会十大綱領

一、朝鮮民族を総動員して広範囲な反日統一戦線を実現することにより、強盗日本帝国主義の統治を転覆し、真の朝鮮人民政府を樹立すること。

二、朝中両民族の緊密な連係をもって日本およびその手先「満洲国」を転覆し、中国人民が自ら選挙した革命政府を創設して、中国の領土内に居住する朝鮮人の真の自治を実行すること。

三、日本の軍隊、憲兵、警察およびその手先の武装を解除して、朝鮮の独立のために真にたたかいうる革命軍隊を組織すること。

四、日本国家および日本人所有のすべての企業所、鉄道、銀行、船舶、農場、水利機関および売国的親日分子のすべての財産と土地を没収して、独立運動の経費に当て、その一部分をもって貧困な人民を救済すること。

五、日本およびその手先どもの人民に対する債権、各種の税金、専売制度をなくし、大衆生活を改善し、民族の工、農、商業の障害を取除き、これを発展させること。

六、言論、出版、集会、結社の自由をたたかいとり、日本帝国主義の恐怖政策の実現と封建思想の奨励に反対し、すべての政治犯を釈放すること。

七、両班、常民、その他の不平等を排除し、男女、民族、宗教などの差別のない人倫的平等と婦人の社会的地位をたかめ、女性の人格を尊重すること。

八、奴隷労働と奴隷教育の撤廃、強制的な軍事服務および青少年に対する軍事教育に反対し、民族の言葉と文字をもって教育し、義務的な免費教育を実施すること。

九、八時間労働制の実施、労働条件の改善、賃銀の引上げ、労働法案の確立、国家機関が各種労働者の保険法を実施し、失業している勤労大衆を救済すること。

十、朝鮮民族に対し、平等な立場で接する民族および国家と緊密に提携し、わが民族解放運動に善意と中立をしめす国および民族と同志的親善を維持すること。